

<被災校舎どう残す> 区域分け全体を保存

東日本大震災で被災した宮城県石巻市の旧門脇、大川両小校舎の遺構保存を巡り、市の震災遺構整備方針を地元住民や卒業生らに示す説明会が13日、それぞれ開かれる。市は会場からの意見を踏まえ、正式な整備計画をまとめる。地元住民や遺族らが昨年7月から遺構の在り方を話し合ってきた検討会議を振り返る。(石巻総局・水野良将、鈴木拓也)

◎石巻・説明会を前に(下)大川小

東日本大震災の津波で児童と教職員計84人が犠牲となった石巻市大川小の校舎は、全体が保存される。

市は2019年度の整備完了を目指す。「震災の教訓を後世に語り継ぎ、防災・減災につなげられる教育の場」(亀山紘市長)と捉える一方、「校舎を見たくない」という遺族らの心情にも配慮。震災伝承エリアと慰霊・鎮魂エリアを整備し、両エリアを植栽で仕切る案をまとめた。

<侵入防止柵設置>

震災伝承エリアのうち、校舎は周辺に侵入防止柵を設け、沿道から見えないように工夫する。津波で横倒しになった渡り廊下や体育館跡、プール、屋外ステージは現状のまま保存する。

釜谷地区と遺族会が校舎南側に設置した慰霊碑とモニュメントは、整備エリアの外へ移設する見通し。



全体が保存される大川小=2016年2月11



被災した大川小の整備イメージ図(市の資料に基づき作成)

慰霊・鎮魂エリアは広場や慰霊碑、花壇などを設ける。

大川小は児童や卒業生、住民らの心の支えとなってきた。震災前、校舎の周囲には桜の花が咲き、住宅やスーパー、郵便局、診療所、交番などが並んだ。

こうした背景を踏まえ、整備エリア全体に桜を植栽する。校舎の北側に管理棟を建て、大川地区の街並みを復元した模型を展示したり、語り部が活動したりするスペースにする。

市の整備方針案には検討会議の意見が反映された。検討会議は住民や遺族らのうち保存派と解体派の双方で構成。昨年7月～今年3月に5回の会合を開き、校舎と周辺の整備や利活用などについて議論を重ねた。

焦点の一つが校舎の内部を公開するかどうかだ。「2階の天井や教室の床は津波の動きや威力を伝える」などと公開を求める声が大半を占めた。管理者やガイドが同行するというルール作りを望む声もある。

学校管理下で例のない惨事が起きた学びやには各地から人々が訪れる。検討会議の出席者からは「慰霊碑やモニュメントは遺族だけで拝める場所へ移す」「一般の人が手を合わせることでできる場が必要だ」といった意見が出た。

<思いくみ取りを>

あの日の巨大地震発生後、児童らは約50分間校庭に留め置かれ、避難開始直後に津波が襲来した。なぜ校舎を残し、何を伝えるのか。検討会議で「真実を語り継ぎ、未来の命を守る」「同じ悲劇を繰り返さない」などと訴えるメンバーもいた。

東北大災害科学国際研究所の佐藤翔輔助教は「肉親や地域を失い、あの場を大切にしていきたいというのが共通の意見」と指摘。整備計画の策定後も、市が関係者の思いを丁寧にくみ取るよう提案する。

<メモ>大川小の校舎は1985年に完成。震災で児童108人のうち70人が死亡、4人が行方不明、教職員13人のうち10人が死亡した。児童は現在、二俣小の敷地に整備された仮設校舎に通う。大川、二俣両小は2018年4月に統合し、統合後の校名は「二俣小」となる。